

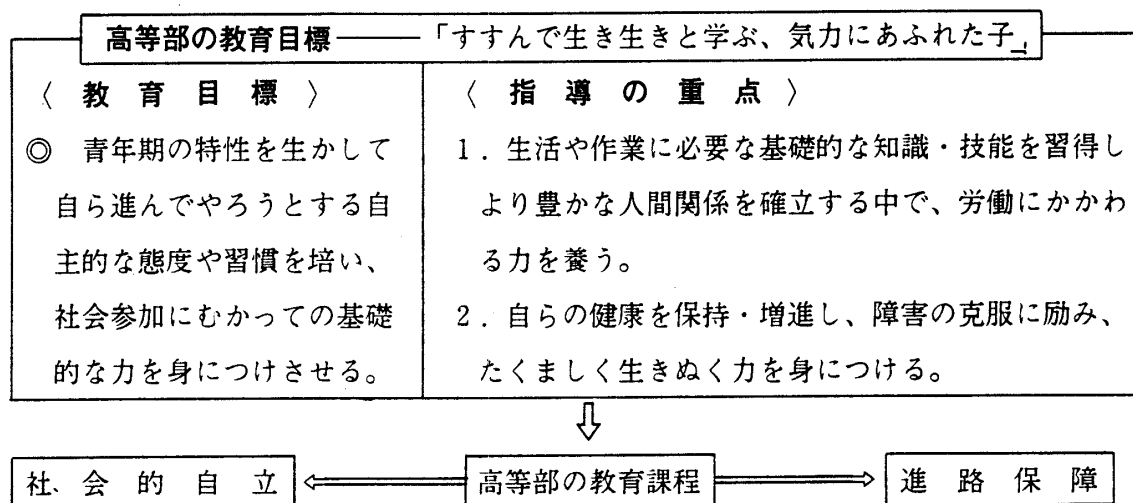
【1】 高等部の教育の基本的な考え方と教育課程の編成、からだづくりへの工夫

高等部の教育目標は、今年度、研究テーマの「からだづくり」ともかかわって、青年期の特性をも留意して、「すすんで生き生きと学ぶ気力にあふれた子」としたが、それは、小・中学部での生活経験を蓄積しながら到達した生活年齢の重みを重視したことによる。

また、高等部の教育課程を規定するものの一つに、「卒業したら働くのだ」という思いが、どの生徒にもあることを重視した点にもよる。これは、高等部を卒業した時点での社会からの要請であると同時に、学校生活の中で育んできた能力を働くという方向で発揮したいという生徒の思いでもある。

ここに、生徒自身が、自らを社会人や大人として自覚するという青年期の特性をみると同時に、我々教師としての教育課題を認識するのである。

そして、この「働く力」は、無目的に黙々と働かされるというだけでは育つものではなく、より主体的に生きる（人格的自立）ことを求めている教育活動を通してこそ育つものであると考えてきた。働くことによってさらに人間的な発達をうながし、働いて得た収入が働く意欲を育み、仕事が社会的に評価され、技術的にも向上し、知識が広がっていくことで生徒たちは仕事にプライドをもって取り組むことができるようになると思う。社会参加を前にした高等部の教育課程は、こうした視点に立って編成される必要がある。しかも、このような「気力にあふれ、意欲的に働く生徒」をつくり上げるベースとなるものが、本校の研究テーマである「からだづくり」であると考えてきた。



【1】 高等部の教育課程編成上の特徴と留意点

教育課程全般を規定する週時表は、次ページの〔表1〕の通りであるが、編成上さまざまな制約があり、教育目標や研究課題に十分に対応したものとなっていない部分があった。

そこで、今年度は、卒業後の「人格的自立」こそ社会参加にあたっての重要な要件であるとの視点から、「働く力」を育てる職業科の時間を増やすとともに、「認識する力」・「生活する力」を育てる「課題別教科学習」の時間を特設した。

また、障害の重度・多様化に対応して、一人ひとりの生徒が学習過程の中で十分に学び活動しきる

ことが可能となるよう、教科・領域での学習集団を「課題別」に編成した。このことにより、学習内容を個別目標に対置し、個々の生徒の発達課題についても配慮した学習を展開しつつある。

しかし、小・中学部で取り組まれてきた学級集団での「生活単元学習」が、高等部では、他の教科・領域を重視していることもあって、行事の事前・事後指導を中心とする学習に矮小化された「生活一般」という形態となっている点は今後の検討課題となっている。

いま、社会参加にあたって社会（企業等）から要請されている力は、①．働く意欲がある。②．体力がある。③．基本的生活習慣、社会性（市民的道德） ④．基礎的能力（学力を含めて）といわれている。とするならば、我々は、研究課題（からだづくり）とも深くかかわって、全教育課程の中でこれらの課題に応えた青年期の教育を創造する必要があると考える。

また、研究課題（からだづくり）との関連で、「からだづくり」の課題領域の運動場面（保健体育科・からだづくり養訓）での取り組みでは、身体を動かすことの喜びを体得させるとともに、運動技能の向上と促進を図ることに努めてきた。また、社会参加の課題ともかかわって、保健体育科で、ゲームづくりを通しての生涯スポーツ（バスケットボール）の創造や、重度化の中でも、系統的な取り組みによって、どの生徒でも可能な運動（なわとび活動）の創造など、障害児が卒業後の社会生活を豊かに暮していく上での展望をきりひろく学習を組織してきた。これらの取り組みは、社会参加を前にした高等部教育の目標を視野に入れつつ、青年期の発達の特性に着目し、その基底となる「からだ」をどのようにつくるかを教育課程編成の上で重視した。

特に、昨年度に引き続き今年度は、これらの運動場面での取り組みの一層の充実をはかりながら、メンタルな面でのからだづくりを重視し、生活場面（職業化・表現化に焦点をあてた職業科・課題別教科学習等）での学習に比重を移した点も特徴といえる。

〔2〕 高等部の生徒のからだの特徴と、「からだづくり」の目標と取り組みの重点

近年、障害児教育の実践において、「生活年齢」の重みが重視されている。また、本校高等部の生徒を「青年期にさしかかった人格の形成」という視点でみると、たしかに成長の中で培った生活経験の蓄積を経て、青年期としての発達の特徴を随所に発見することができる。

それは要約すると次のような点である。

曜日 時間	月	火	水	木	金	土
8:40	登校・朝の生活					
9:00	ホーム ルーム	生	生	生	生	生
9:40	朝の活動（朝の運動・課題別養訓）					生
10:25	長 休 憩					
10:45	職	課 教	職	課 教	職	生
11:25	職	課 教	職	課 教	職	着替え ホーム ルーム
12:10	給 食					
12:45	洗 面 ・ 休 憩					
13:10	掃 除		掃 除	掃 除		
13:30	音A 体B	クラブ	生（奉仕）	共同 作業	音B 体A	
14:10	音B 体A	委員会	着替え ホーム ルーム		音A 体B	
14:30			下 校			
14:55	着 替 え			着 替 え		
15:10	ホ ー ム ル ー ム			ホ ー ム ル ー ム		
15:30	下 校			下 校		

- (1) 急激な身体発達の伸びと、第二性徴の発現がみられる——大人の身体になる（身体的成熟・性的成熟）。
- (2) 認知的能力（感覚、表象、ことば、道具を操作する力、記号操作力など）の萌芽がみられる——生活経験の蓄積による自己調整力の増大、自己調整力の育ちにもなう集中力、持続力の高まりがある。
- (3) 自己確認・自己評価の力が育ち、いやなことを拒否したり、楽しいこと、関心のある活動に意欲的に取り組もうとする。

このような青年期の発達的特徴を重視した「からだづくり」は、当然のこととして、「主体的」・「意欲的」に活動させる機会を多面的に保障することが基本となる。そのために、研究実践の場とは直接には関係づけてはいないが、「主体性」の育ちは、自治能力や知的能力を育てる中でしか発揚できないと考え、児童・生徒会活動や、系統的な教科学習を重視してきた。

なお、認知能力の育ちの弱い生徒には、各実践場面でできるかぎり活動量を上げることが、「からだづくり」の基底となると考えた。

こうした3年次にわたる検討を経て、高等部のからだづくりの目標を「すすんで、生き生きとからだを動かす子」として定着させた。

特に今年度は、運動場面で培った力が、生活場面でどのように生かされ発展させられたか、特に、生活態度とか技能、集団（社会）の中で生きぬく力といったメンタルな面での「からだづくり」に努めてきた。

その実践の場が授業であることは言うまでもないが、この授業づくりについては後述するが、教育課程と研究課題の関連については次のように考えて実践してきた。

